

画像計測は Image J を用いて行った。

【結果】浅層から深層への位置関係の変化を絶対値で評価したところ、水平的位置関係では、最大値19.8%、最小値0.6%、中央値9.0%であるのに対し垂直的位置関係では、最大値8.8%、最小値0.2%、中央値3.0%であり、水平的な計測結果での変化が大きかった。

【考察】今回試作を行った計測器を用いることにより、頸部の浅層から深層にまたがる構造物や複数の構造物の位置関係についての計測が可能であると考えられた。今後は、撮影方向の規定法に工夫を加えるとともに、浅層に存在する胸鎖乳突筋に対しての奥羽調整機能を工夫することにより、さらに精度が高まるものと考えられた。

14) 当科における薬剤関連顎骨壊死(MRONJ)に関する臨床的検討

○柳田みずき、川原 一郎、高田 訓
飯島 康基、高橋 進也、菅野 勝也
浜田 智弘、金 秀樹、大野 敬
(奥羽大・歯・口腔外科)

【緒言】2003年、Marx がビスフォスフォネート製剤に起因した顎骨壊死を報告して以来、ビスフォスフォネート関連顎骨壊死 (BRONJ) として報告されてきた。近年、ヒト型抗 RANKL モノクローナル抗体であるデノスマブでも同様の顎骨壊死が生じることが示され、それに伴い、2014年、薬剤関連顎骨壊死 (MRONJ: Medication Related Osteonecrosis of the Jaw) へ名称が統一された。今回われわれは、当科における MRONJ 患者についての臨床的検討を行ったので報告した。

【対象および方法】対象は、2005年1月から2014年12月までの10年間に当科において MRONJ の診断を得た48例で、検討項目は、発症件数、年齢、性別、薬剤、原疾患、発生部位、発症契機、ステージ分類、治療、治癒転帰とした。

【結果】発症件数は2007年より年々増加傾向にあったが、2012年12例をピークに現在は落ち着きつつあった。初診時の年齢は70歳以上が32人と半数以上を占めた。性別は男性7例、女性41例であった。薬剤は注射剤17例、経口剤31例で、

注射剤のうちデノスマブ由来が1例だった。

原疾患は骨粗鬆症31例、乳癌11例、前立腺癌4例、多発性骨髄腫2例であった。発生部位は上顎骨が18例、下顎骨が26例、上下顎骨に発症したものは4例であった。発症契機は抜歯が33例と多数を占めた。ステージ分類ではステージ2が33例と最も多かった。治療法では、保存的療法のみが34例で、腐骨除去や骨搔把術などの観血処置を施行したのが14例であった。治癒転帰では上皮化したのが20例、上皮化しなかったのが21例、不明が7例だった。経口剤投与症例での治癒転帰は、31例中18例で上皮化し、注射剤投与症例での治癒転帰は、17例中2例のみで上皮化した。

【結語】医師・歯科医師への顎骨壊死に対する知識の浸透により、当科における MRONJ 発症件数はピーク時より落ち着きつつあるが、デノスマブの普及に伴い増加が予想される。しかし、現状では MRONJ 発症メカニズムや根治的な治療法は明らかでない。今後、MRONJ 患者を通じて適切な対応策のさらなる検討が必要である。

15) 歯周外科の主目的を再考する

○宮尾 益佳
(宮尾歯科クリニック)

【緒言】歯周病で他医院にて抜歯を宣言された患者さんが歯牙の保存を希望して来院した。主訴歯牙は歯周外科治療を行い保存をした。

その際、「Minimally Invasive Surgery」を用いたのだが、外科的侵襲を最小限するこの方法では術野が狭いので肉芽組織が完全に取りきれないという声がしばしば出る。しかし、歯周外科の主目的は肉芽組織の除去なのだろうか。

【症例概要】患者さんは50歳、男性。5年前に歯周病で左上1番、2番を抜歯して部分床義歯をセットした。最近、右上2番、3番の歯がぐらついてきてまた抜くと言われた。

歯周基本治療後、改善傾向が診られなかった主訴部位には歯周外科治療を施行した。義歯だった欠損部はブリッジにした。最終補綴後、問題はないので歯周サポート治療に移行した。現在は歯周サポート治療2年目である。

【考察】Lindhe, Nyman は歯肉フラップを開け肉芽組織と根面の感染を除去する歯周外科と肉芽組織は残したまま根面の感染だけを除去する歯周外科の治癒の差を検討した。結果、差はなかった。

Ramfjord らは肉芽組織を除去する歯周ポケット搔爬と根面の感染を除去するスクレーピング・ルートプレーニングの治癒の差を検討した結果、差はなかった。

歯周外科の主目的とは肉芽組織を除去することではなく盲目的には除去しきれなかった歯肉縁下のプラークを確実に除去することにある。

切開や剥離を最小限に行うことには利点がある。例えば、患者さん側術者側双方の負担が少ないこと、出血が少ないこと、術後疼痛が少ないこと、手術時間が少ないこと、安価で出来ることなどだ。

【結語】歯周外科の成否は切開や剥離の方法ではなく、患者さん自身のプラークコントロールにある。

16) 奥羽大学歯学部附属病院における最近の初診患者の動向 ー第2報ー

○清野 晃孝, 小松 泰典, 渡邊 崇, 成田 知史
保田 穰, 佐藤 健太, 佐藤麻里恵, 北條健太郎
奥座 崇史, 杉田 俊博
(奥羽大・歯・附属病院)

【目的】奥羽大学歯学部附属病院は、歯科医療に求められる、安全で安心な医療サービスの充実に心がけており、ニーズの多様化に対応すべく各種専門外来を設け、地域医療機関からは、検査および特殊な疾患の治療などの依頼も受けている。

そこで、本院の現況を再認識すべく、昨年調査した同じ期間の7月から9月までの3か月間の初診患者の動向について調査し、昨年と今年と比較検討を行ったので報告した。

【調査方法】対象は平成27年7月1日から9月30日までの3か月において予診科に来院した初診患者の中で同意の得られた411名である。

アンケート調査項目は、性別、年齢、職業、住所、主訴、交通手段、当院選択理由の7項目とした。

【結果および考察】

1. 女性がわずかに多く、両年度とも54%を占めた。

2. 年代別では、27年度は幅が広く、20代から70代が多く、50代が最高で22%を占めた。

3. 職業は両年度で男女ともに「会社員」が最高で、次に「無職」が続いた。

4. 住所は両年度で、60%が「郡山市内」であり、「他の地域」はわずかであった。

5. 主訴は両年度で「歯痛」が最も多かったが、27年度は多様性が示された。

6. 当院を選択した理由は、27年度は「以前の受診から」が最大の30%であり、さらに「他院紹介」、「当院の評判」が微増していることが、新患数を1.9倍に増加させている誘因と考えられた。

今回の対象者は、他院からの診療情報提供1において口腔外科を紹介先にしている場合および中学生までの子供は除かれており、ほぼ総合歯科の患者が該当したといえる。そこで年齢が高齢者のみならず、50代を中心に30、40、60代が多かったことが示された。

そのため、住所は郡山市を中心とした地域が大半であり、交通手段は「自家用車」がほとんどであった。また主訴は「歯痛」が多いが、粘膜疾患等の口腔外科系の疾患も散見された。当院を選択した理由として、「他院紹介」、「当院の評判」が微増していることは、昨年度よりも大学病院としての信頼性はもとより、奥羽大学だからとの「評判」に近づいていることが示された。

17) 総義歯に不満がある患者に対しインプラントオーバーデンチャー (IOD) を実施した2症例

○山本 雄介, 川西 章, 斎藤 弘毅
山崎 厚作, 高橋 慶壮
(奥羽大・歯・歯科保存)

【緒言】通常の義歯に対して種々の不満のある患者に対してはインプラント治療が極めて有効である。しかしボーンアンカーブリッジでは高額な費用やメンテナンスの煩雑さなどの欠点がある。IODはその欠点を回避し、患者の満足度も得ることが出来る治療として有効と考えられる。